
編集後記

昨年は、医薬品のリスクと情報提供に注目した医薬品販売制度改正、混合診療の解禁、処方せん薬の新分類、薬学部6年制など、薬学130年の歴史の中で、大きな案件が数多くとり上げられ、一方、年末のスマトラ津波や台風、地震など大災害が多数発生し、まさに、激動の1年でした。あのカルロス・ゴーンは、「困難にたち向かうには、問題を理解できれば、残り50%はその解決策をどうつくり、実行するか」と明言しています。様々な内容の得策が早急に望まれるところです。

本号は、「医療過誤防止と情報」を様々な角度から特集しました。情報には、“目にみえる情報”とその下にひそむ“見えづらい情報”とがあります。見える情報は、数多く発信され、患者も享受できます。しかし、見えづらい情報は医療従事者が、患者とコミュニケーションをとってはじめて、情報が活用される場面へと展開します。うまく共有された情報は信頼へつながり、その延長線上に、質の向上があります。この“共有”こそが事故の再発や発生防止に役立ちます。

本年6月に福井で開催される第8回日本医薬品情報学会学術大会のテーマは、「医薬品情報とファーマコビジランス」で、です。ファーマコビジランスの用語は、1973年フランスにおいて医薬品安全性関連システムに対して導入されたのがきっかけで、安全対策への監視システムのことです。ファーマコビジランスはICHE2Eの公表を受け、最近ではFDAから、リスク最小化のための活動計画のガイダンス案が作成されています。今期の学会を機に、関連するご研究のご発表や投稿を是非お待ちしております。

本誌が講読の皆様方へ何らかの道先案内人の一人となれるよう、今後も編集を組んでいきたいと考えております。今年も皆様方からの投稿や様々なメッセージをお待ちしております。

(編集委員 泉澤 恵)